

トムソーヤへの道 第1章 焚き火マスター 焚き火道は愛の道

焚き火はアウトドアの基本中の基本、たかが焚き火されど焚き火、焚き火は、春夏秋冬、夜のお友達であり、あなたの恋人なのです。我々、現代人がこれに惹かれるのは、太古よりのDNAを我々が引きずっているからなのでしょう。

ガンコ山の焚き火道で、まず、なにをもっても大事なことは、

「焚き火の道を極めるということは、愛の道を知ること」だということを、申し上げたいのです。

現在、恋愛中である方や、夫婦仲がギクシャクしていると自覚している方は、是非、「焚き火道」を極めることをお勧めします。自分は自覚しているが、相手方が鈍感で心のすれ違いを感じとれないという相手をお持ち方は、是非、その鈍感パートナーに焚き火道を教えてあげてください。

焚き火の3大原則第1条 燃すものは天から与えられた土に帰るもののみ

ところで焚き火になにを燃やすか？ それは、まず思い浮かぶのは木です。焚き火では、とにかく天然にある木類が基本であるべきなのです。なぜなら焚き火とは神聖なもので、加工品を燃すことは、ゴミの焼却みたいで、天地神明の道理に反する行為になるからです。なぜに、ビニール袋とか、新聞紙とかダンボールとかタバコとかアルミ箔とか、そういうものを、焚き火で燃やしてはならないかという、焚き火の末路である灰が汚染されるからです。木は、火になり火は灰となって土に帰らねばなりません。ガンコ山には色々な種類の山菜がありますが、灰は、ワラビやタケノコなど山菜を食べる時、そのアクを抜くのに使用します。これを灰汁抜き（アクヌキ）といいます。

カレーのようなべとべとの油汚れの鍋や食器を洗うのにも灰を使用します。灰はアルカリ成分なので、酸性の油分に使用すると、面白いほど油が落ち、洗剤として代用することができるのです。昔は衣服汚れを落すのにも使っていたようで、汚染のない洗剤です。ガンコ山で、このことを知り、きちんとレポートを書いて発表したマリちゃんは、世田谷の科学創意工夫展に入賞したと嬉しそうに報告してきました。

炭火の魚焼きと電気グリルの魚では旨味がぜんぜん違います。これは炭の遠赤効果もあるが、灰のアルカリ分が肉の脂肪を適度に中和させるからだという話もあります。畑にも土の成分調整に使用します。

したがって、ガンコ山の焚き火道では、タバコのニコチンや薬剤の入ったダンボール芯が灰に交じるということは、汚らしいというになるのです。昔、サンカという漂泊の民が山にいたそうです。彼らは焚き火の場所を神聖な場所として、そこから東に向かって独特の祓詞をあげたという伝説があるのです。ガンコ山の秘密基地族たちも、その例に倣って焚き火を神聖なものとして崇めています。

焚き火の3大原則第1条 「燃すものは天から与えられた土に帰るもの」というのを覚えておいていただければ幸いです。

焚き火の3大原則第2条「小さな火から大きな火を育てる」

どうやって、炎を燃やし、火を育てるかという話です。

良質な焚き火は、最終的には薪を燃やすことによって成り立ちます。薪とは、杉であれ、雑木であれ、丸太状にタマガリカットされたものを、薪割で縦に割ったものです。

しかし、いきなりマッチやライターで薪に火をつけることはできません

順を踏んで、火を育てていかなければ、火は育たないという火の習性を、子どもさんに教えてあげて下さい。火は電気のスイッチじゃないということです。まず、杉林があれば、そこから枯れて乾いた杉ッ葉を集めてきましょう。これが焚付けの材で、焚き火のキッカケとなるものです。椎などの枯葉でもよいです。

恋のキッカケはいくらでもつくれるし、落ちていますが、淡いものであり、ポツと火は付き易いが、すぐに消えてしまうものです。焚き火の焚付け火も同様です。そこで、消えないようにあらかじめ、もう少し、大きな火にする手を打っておいて、落ちている木なら極細い小枝をたくさん集めておきましょう。

細い小枝でなく、細めの竹を細かく割ったものでもよいです。焚き付け材の上に、竹を丸ごと入れたのではいけません。竹は節と節の間は空洞だから、熱せられると爆竹のように撥ねて危ないのです。竹をくべる時は、いつも割らなければいけないことを覚えておいてください。

ナタでワリを入れてもよいが、杉の丸太を加工した叩き潰し器で竹を縦に粉砕します、このとき自分の足を粉砕しないよう気をつけてください。焚付けで生まれた火は、燃えやすくとも、不安定で、すぐに消えてしまう質の火です。あの人いいな、と思って何かキッカケをこさえて、やっどこさ、口を訊いてくれるようになった程度のも、まだ、おつきあいしてもよいかな～ せいぜい、ほんの指と指が偶然絡みつ়く程度のもので、もっと炎を大きくする努力をしなければ、薄っぺらなヤツね、で終わってしまいます。

小枝やら細い竹割材から、もう少し、大きな枝や竹割材をくべる。ここで、焦って入れすぎではいけません。相手が釣れたら今度は面倒臭くなる。大き目の焚き火材をくべて、手抜きで放っておこうとします。そうすると焚き火は拗ねて、煙だけ出して燻りだします。ちょっと乱暴に扱ひすぎた。そしたら、今度は煽いだり、火吹き竹で吹いたり、今度はご機嫌をとるような努力を払います。もう互いにわがままも言う仲になってついケンカもする頃、そんな時に、ゴ.メ.ンと言って、やたらに煽いでヨイショするのははいずこも同じです。いや、この感覚が無くなった方たちこそ、焚き火道で思い出していただきたいわけです。話は元に戻り、炎が燃え盛ると同時に、火の量も多くなってきて、やっど薪を入れます。放っておいて、これらが燃え盛った後に、薪を入れても上手くいきません。時間だけ経っても、醒めた愛に炎は灯らないのです。

さて、このように薪をくべて焚き火にするには、順を踏んだ努力が必要だということがお分かりいただけました。たまに、いらっしゃるのですが、火の無いところに薪を転がし、いきなり、トーチなどで薪に火をつけようとする御仁がいるわけで、この行為がいかにもむちゃくちゃな蛮行であるのかということがご理解いただけると思います。これは、たとえていえば、道を歩いていて気に入った人に、いきなり抱きつき、「お、お、おい、アンタが好きやねん」と迫るのと同じくらいお天道様の理に反していることなのです。 **焚き火の3大原則第2条「小さな火から大きな火を育てる」**を覚えておいていただきたいと思います。

さて、焚き火道は。薪をくべて終わりというわけではありません。ここから先が焚き火道の真髄なのです。

焚き火の3大原則第3条 究極の原則 「焚き火の火は細く長く熱く」

苦勞してつけた火、太めの竹や枝で、炎を大きくします。さて、炎がピークに達した時に、ついに決断して薪を入れるのですが、薪の火は、今までの見せかけ駆け引きのある火とは違います。薪に火がついたなら、ちょっとやそつとでは後戻りしたくてもできない関係になります。

焚き付けから始まり、段々に順を踏み、十分な準備をし、やっと薪という火の芯、心に会えるのです。

焚き付けの葉の火や、木っ端の炎は、決して心が熱く滾る真の炎ではありません。薪、その火の熱さは、枝の頃とは比較にならないものです。

炎がおさまった後、そこに現われるのは、赤く熱く滾るもの、それこそがオキです。これこそが、真の火であり熱い心の内なる火なのであります。オキの火は静かだが、燃え盛る炎よりも熱い。その熱は人の心を暖め、万物に染み込んでいく。だから、もちを炙り、魚を焼くのもこのオキの力でやるのです。

よい焚き火とは、このオキの力をつくり、最大限持続させることにあります。そうすれば無駄なエネルギーの浪費もありません。オキの力は強い、簡単に消えるようなものではない。さりとて完全に放りっぱなしでよいというものでもありません。新しい薪を適量より多く入れたりすると、燻ったりして煙ばかりが出て拗ねたりします。そういう時は、乱暴に扱って悪かったね、といいながらうちわで煽いだり、火吹き竹で吹いたり、なだめてあげましょう。逆に安心して放りっぱなしにして、どこかに単身赴任していて帰ってみると、かなり火が冷え込んでいる。こういうときは、煽いだり、ヨイショしたりなだめたりするだけではダメで、最初に火をつけた時代を思い出し、枝や木っ端、竹なんかをせっせとプレゼントして、その上煽いだり吹いたりしてご機嫌をとってあげるのです。そうすると、また薪の火はオキになって熱い火をともしてくれます。

このように、ガンコ山の焚き火道は愛の道に通じているわけですが、指導した人の中には焚き火をしている間に、火のつけ方が、原因でケンカになった御仁もいるので、結果はあなたの想定外ということもありえます。

薪となる燃し木の材料ですが、それはクヌギ類をはじめとする雑木類が断然優れています。オキになった時のエネルギーが杉などと、断然違い、焚き火にしても薪ストーブにしても暖かさ、持続性で素晴らしくよいのです。杉は水気が多く燻りやすく、特に寒さに揉まれない南の杉は、目のつまりもすかすかで、オキに留まる時間はわずかで、灰になってしまいます。それでもクヌギが少なく、杉が多いので代用せざるを得ないのは、しかたありません。薪炭エネルギーを必要としていた昔は、クヌギ一本を30年に一度の間隔で切っていて、30本あれば1年に一度1本切るという勘定です。クヌギなど雑木は株さえ残しておけば、そこから再生してまた木となり、そういうサイクルで必要な分を切っていました。

杉は切ってしまうと、株から再生するという事はなくまた、植林しなければなりません。薪炭エネルギーが放棄され、その後、林業材として杉に価値が移り、雑木の代わりに杉が植林されました。今は、その杉林も輸入木に押され、放置されているところが多くなりました。山は文化を映し出す鏡ともいえるのです。

人の心を暖め、癒してくれるのが焚き火です。その火は燃え盛る炎ではなく、内なる芯に赤く熱く静かに滾っています。限りある資源とエネルギーを、できるだけ長くもたせることが、焚き火をする人の叡智です。

焚き火こそが、人類が人として生きるために手にした最初にして永遠の文明であり、社会の鏡です。

焚き火場は、火という自然が与えてくれた偉大なエネルギーを作る神聖な場です。同時に、焚き火の道は人としての道を学ぶ場でもあり愛を育む場でもあるのです。

焚き火の3大原則第3条 究極の原則 「焚き火の火は細く長く熱く」を忘れないでいただきたいと思います。